

発 刊 の 辞

岩 瀬 孝

今回の企画について知ったとき、私は若い研究者たちの熱意をよろこび、これに協力することを約したが、同時に、いろいろと苦言を呈した。それは、何より彼らが私にとって大切な存在だからである。このグループは、私の研究室成員の研究テーマがカトリックの文学、ブルースト、16世紀の詩、現代の文学的演劇、前衛劇といろいろに分化が激しくなり、古典劇研究に中心を置くことが困難になったころ、伊藤洋教授をリーダーに私的サブ・ゼミとして誕生した古典劇読書会である。伊藤洋君はパリ大でギョラボン教授に師事し、17世紀バロック喜劇の研究で大学博士号を取得した俊才であるが、私とは、大学院の修士論文『コルネイユ喜劇の研究』で副査について以来の準師弟関係にある。「準」というのは、当時の大学院では私など論文審査によび出されるだけで、佐藤輝夫博士を中心とする長老教授が永年にわたり不動の指導体制を構成されていたからである。わずかに河合亨先生が大学院に新風を吹きこまんとして努力されていただけだった。私は長老連に速慮しいしい、バロックの意味をより明確にしない限り、バロック概念でコルネイユ喜劇を截断することの危険を指摘したにとどまり、大要不満だった。私などこの優れた論文の総合評価など述べる資格はないという雰囲気であったからである。しかし、伊藤君は渡仏後の努力で、見事に、私の批判をのりこえる業績を示し、現在、学会レベルでも優秀な研究者として指を折られる中に入った。従って、私は、学部時代から修士課程まで、その勉学を見て来た竹田宏、橋本能、関谷苑子、野池恵子、四君が伊藤洋研究室で古典劇読書会を開くとき、安心してその指導に任せることができた。秀才竹田宏君はその後都立大に職を得て多忙となり、現在は客員存在だが、一方慶大の神保剛君と皆吉郷平君とが参加した。神保君は慶大助手を勤めているが、鋭い分析的知性をもって演劇の理論面の研究を得意としている。皆吉君は温厚快活な人柄としっかりした学力を示してグループに溶けこみ、橋本君は修士でコルネイユを専攻した篤学な青年で、素直な性格からみなに愛されてきた。この二人の好青年は、それぞれ慶大講師慶高専任教員、駒沢大、大東文化大講師の位置にあるが、白水社で『コルネイユ作品集』を編んだとき、竹田宏君と共に、この二人の協力を得られたことは、私にとって近來の快事である。関谷苑子、野池恵子両君は、学部時代からラシーヌを勉強し、前者は批評家風のシャープな感覚に富み、後者は誠実に正面から研究に取り組むというタイプの差こそあれ、終始ラシーヌ研究への情熱を涵らさなかった。これに東京教育大から紹介された小林君が参加

して、今日に至っている。この間、橋本君、小林君はコルネイユについて、関谷君はラシーヌについて、それぞれ学会発表をし、野池君は大学院紀要に「フェードル論」を書いた。現在、関谷君は津田塾大、桐朋大、野池君は桐朋大、駒沢大の講師を兼ねている。

このように、彼らはそれぞれすでに実績を示した研究者群である。足早に巣立った長崎外語短大助教授戸口民也君は紀要に執筆し九州フランス文学会で発表しており、私はこれらのすぐれた学力ないし実績をもつ若い人達の育成の一担に微力を貸したというだけで、もって冥すべしとさへ思っている。

ただ、彼らへの愛情が強いからこそ、この論文集に期待もするとともに、厳しい注文をつけることも許してもらいたい。彼らが、この論文集が一つの帰着だと思っただけでは困るのだ。これはやっただりついた高山の中腹にすぎない。修士時代によく叱ったことだが、皆まだ若かったし学力も不十分だったので、研究方法の確立を求めるとこれに熱中して原典の精読を怠り、原典の精読を求めると方法論をなおざりにしがちで、竹田君をのぞくと、一人としてバランスのとれた進み方を示した者はない。今や、原典精読も伊藤君の指導で大いに進歩してきた。それでこの論文集が出るというのが、現在の段階なのである。次に諸君に求めたいことは、研究の視野をひろげることである。コルネイユについて万卷の文献を積重ねラシーヌについて絶版の参考書の入手に奔走するのもけっこうだが、ジャック・トリュシェはその「フランスの古典悲劇」の序辞で「古典悲劇は一個の広範な社会=文化現象だった」から「私は『フェードル』について、いやラシーヌについてさへ、コルネイユとラシーヌについてさへ論じ立てようとは思わぬ」と述べている。この点についての反省は、いくらなされても足るまい。諸兄姉は、ようやく、コルネイユ、ラシーヌの粹から1630年代の戯曲へと視界を広げてきた。すばらしいことである。しかし、それだからこそ、「私は演劇専攻だから、小説や詩などまったく知らなくともいい。」「このころの思想は避けて通りたい」という式の甘さも捨てねばならない。1630年代における古典文学の形式に、複雑多様な要素が働いていることは、今さら言うまでもない。専門を強いて孤立させての「私の専攻」に逃げこむには、諸君は成長しすぎたのだということを取り返して、筆をおく。